

SELHi 1年間の実践と反省、 そして期待

福井県立勝山高等学校 山内 悟

1. 勝山高校について

本校英語科では、平成16年度から、それまで1年次で週1～2時間を充てて行っていた文法の授業をやめ、オーラル・コミュニケーション（3単位）と英語I（4単位）の授業を行う中で、リスニングやリーディングのほかに、スピーキングやライティングの指導も行い4技能の力を伸ばそうと授業を行ってきた。

平成19年度より、SELHiの指定を受け、「国際社会を生きるための英語の自己表現力と生徒の意欲を高める指導・評価のあり方について～ライティングを中心に～」という研究開発課題のもと、研究・実践を行うこととなった。

2. SELHiの取り組み内容

(1) 多読指導

本校では、以前から多読指導を行ってきた。Penguin Readersなどのテキストを与えて、どんどん読ませる。テストは行わない。英語のインプットを増やす手段として行ってきた。

平成19年度も、4月から多読計画を開始した。まずはPenguin EASYSTARTSから始め、1学期はこのレベルで通した。1学期末にOXFORD BOOKWORM Startersを8種類×5冊×5クラス分購入し、各教室の本棚に設置して、夏休みの課題として全員8冊読破に取り組みさせた。2学期に、ようやくPenguin Level 1に入り、結局年度の終わり近くまでほとんどこれを通した。

基本的な考え方は、「易しい英文を楽しみながら（時には、批評もしながら）たくさん読む。テストなどの評価はしない。」というものである。Book Reportは提出させたが、コメント・感想欄の最後に「オススメ度」というのをつけて、最高☆5つまでで評価させた。

数冊読み終えるごとに“My favorite Book”と題したレポート英作文を書かせた。

(2) 授業の工夫

授業では英語の使用を心がける。教科書を全く使わず、導入の活動で1時間を使い切ることもあれば、まとめの学習として関連する教材（後述）を使って何時間もかけて活動に取り組みさせることもある。

Casual Talk（授業の最初にペアで行う簡単なトピックについての会話）の内容をJournalに書かせることもやった。

できるだけペア・グループで活動する時間をとった。文法学習の時でも、2人の生徒に違う問題のプリントを与え、互いに問題を出し合うなどもした。

音読指導では、リピーティングからシャドーイングまでいろいろな音読に取り組みさせた。音読テストも行い、声の大きさ・発音・強弱・アイコンタクトなどの観点で点数をつけて、評価シートに励ましの言葉を書いて返した。

教科書の内容、または関連する題材をパワーポイントやビデオで提示し、視覚に訴える工夫もした。例えば、ラオスがテーマのレッスン（EXCEED I Lesson 7 “A Bridge between Japan and Laos”）では、ラオスの切手20枚の中から1枚を選ばせ、その絵柄から想像できるラオス人の暮らしを英語で発表させた。また、(4)で述べるREPRODUCTION活動にも写真を利用した。

(3) 関連教材の作成

本校は英語I、IIの教科書としてEXCEEDを採用している。教科書に難解な語彙・表現が多く、文法・構文が複雑であると、結局理解させ

ることに終わってしまい、そのあとの活動をさせることが難しくなると考え、教科書はそれほど難しくないので選び、それにプラスした活動を行っていきこうというのがこの教科書を選んだときの共通理解であった。

三省堂の方には、関連教材作成のための参考資料を送ってほしいと依頼した。担当の方からは、各レッスンに関する資料を次々と送っていただいた。それらも参考にしながら、本校生徒向けの教材作成を行った。例えば、土星の話(Lesson 6 “The Wonders of Saturn’s Rings”)では科学雑誌“Newton”やNASAのホームページから情報を拾い出し、教科書には書かれていないことを補足する教材を作成した。

Lesson 7, 8と終盤になる頃には、レッスンごとにテーマを設けて、それに沿った関連教材を作成した。Lesson 7では、「国際援助」をテーマに、日本人が外国で援助活動に取り組んだ4つの事例を350語程度の読解教材にした。これをそれぞれ別々の生徒に読ませ、自分の読んだストーリーを、4人グループの他の3人に写真を使いながら説明するという活動を行った。(4)で述べるREPRODUCTIONの一環である。

Lesson 8 “A Message from Forty Years Ago”では、レイチェル・カーソンが扱われている。中学校教科書(NEW HORIZON:東京書籍)でも彼女が扱われたUnitがあり、そこでは“20th Century Greats”と題してその他の偉人についても触れている。そこで、「いろいろな偉人について学ぼう」とテーマを決めて、ジーコ、ジョン・レノン、マザー・テレサ、アグネス・チャン、手塚治虫など、様々なジャンルで活躍した(している)人々を紹介する教材を作成し、互いに紹介しあう活動などに利用した。レッスンの最後には、“Who is the greatest?”というテーマでライティングをさせた。

(4) REPRODUCTIONとライティング

2学期からREPRODUCTIONと称した活動を中心に行った。読んだり聞いたりした内容をライティングでまとめるというものである。(1)の“My Favorite Book”では、気に入った本の内容をsummarizeし、自分の感想を書き足す。

Casual Talkの再現や、(3)の教科書に関連する教材を利用した活動もそれにあたるだろう。

考えてみれば、本校生徒に与えたライティングの機会はかなり多い。教科書に挿絵や写真があれば吹き出しをつけてせりふを書かせたり、クリス・ムーンのレッスンでは、「彼の講演会にいたらどんな質問をするだろうか」、さらにはその紙を交換させて「自分だったらその質問にどう答えるだろうか」など、英語を書くチャンスを見つけて取り組ませた。もちろん口頭でも可能だが、書かせることによって言語形式への意識が高まるし、書く時間、すなわち考える時間が保障されれば生徒は安心してその活動に取り組むようになるであろう。

3. 授業紹介 ～研究報告会での公開授業～

平成20年2月8日(金)にSELHi第1年次研究報告会を行った。ここでは、その時に私が行った公開授業を紹介する。

扱ったレッスンは、レイチェル・カーソンについてのLesson 8である。教科書本文の読解活動等が終了したあとに、ビデオ『夢伝説 ～未来への伝言“沈黙の春”～ レイチェル・カーソン』(NHK総合、2001年6月18日放送)を視聴させておいた。45分番組のこのビデオから、DDTが飛行機で散布される場面、鳥や魚が息絶えていく場面、レイチェル・カーソンがテレビでインタビューに答える場面、ロバート・ステューブンスがレイチェルに対する反論を述べる場面、などいくつかの場面を取り出し、2分程度のDVDを編集した。音声なしの、映像だけのDVDである。

このDVDを2月5日(火)に見せ、「ナレーション原稿を作ろう」と生徒に投げかけて、ライティングをさせた。まずDVDを何回も見せながら、プリントの枠の中に各場面のイラストを描かせた。生徒には「どの場面を特に説明するといいナレーションになるかを考えながら、その場面をイラストに残そう。」と指示をした。イラストがだいたい描けたところで、DVDを流すのをやめ、今度は「イラストに残した場面を説明するための英文を書こう。」と指示をし、枠の横に英文を書かせた。これが、最初の原稿である。

次に、ナレーション記入用紙を配り、原稿の英文を書き写させた。これは家庭学習で行わせたが、「ミスに気づいたら直すこと。文のつながり、場面のつながりを考えて改めるべき点に気づいたら直すこと。」と指示をした。家庭学習で書いた第一稿を使って、翌日2月6日（水）の授業である。ペアで相手の英文を読んで、互いに手直しのためのアドバイスをし、第2稿を書き上げる。これを推敲した第3稿を2月7日（木）に提出させて、そのうちの20作品をその日の夜に選び、A1・B1、A2・B2、……、A10・B10の10組に分けた。

さて、2月8日（金）の公開授業である。4人グループを作り、グループ1にはA1・B1の原稿を、グループ2にはA2・B2の原稿を、という具合に各グループに2種類の原稿を渡す。グループ内にその原稿を書いた生徒がいないように組み合わせさせておいたので、誰の原稿かはわからない。生徒は2つの原稿をリーディングするわけだが、そのあとにどちらか良いほうを選ぶようにと指示しておく。そして、グループ内での話し合いの時間だ。「I think script A is better because」などとグループ内で意見交換をさせ、最終的にAまたはBのいずれかを「Our Favorite Script」に選び、クラスの生徒に発表する。「We think script B is better. We have two reasons. First, it is easier to understand. Second, we liked the last sentence.」という具合である。この段階で初めて、誰の作品かが、教師から発表されるという流れだ。

選ばれた生徒は教室の前に並び、順番にDVDに合わせて自分のナレーション原稿を読む。テレビのナレーターさながらに、マイクを持たせて、スピーカーから生徒の「生声」を流す。聞いている他の生徒は、評価シートに「お気に入り度」を☆5つまでで記入し、どこがよかったかのコメントを残す。

公開授業ではここまでであったが、その後の授業では、公開授業で選ばれた生徒の作品のうちどれが最も良いかを全員の投票で決定し、それをみんなで直す作業を行った。ALTにも協力してもらい内容・表現ともに完璧なナレーション原稿を仕上げたのである。

4. 研究報告会・公開授業を終えて ～反省～

公開授業のあと、大きな反省が残った。「そもそも、コミュニケーションとは何か？」ということである。私たちは、上記のような教材作成にエネルギーを注ぎ、REPRODUCTIONというフォーマットに生徒を乗せることで、SELHiを進めてきた。かなりの時間と労力をかけたことは事実だが、そのうちに「コミュニケーションとは？」という本質を忘れてしまった。「今からこれを読みなさい、5分間でまとめなさい、相手に説明しなさい、相手の話をメモしなさい、メモを見て文章にしなさい」などの指示に従って行うあまりにも型にはまった活動は、生徒が真に求めるコミュニケーションからは遠いところにある。

REPRODUCTIONという活動が完全に間違っているわけではないと思う。SELHi2年次は、生徒が自分の感想や意見を伝えあい、共感したり、対立したり、疑問を感じたりという授業実践にチャレンジしたい。

5. SELHiがくれるもの ～私の期待～

多くの人に授業を見られるのは、緊張する。そして、自分の至らなさを痛感させられ、落ち込みもする。しかし逆に考えると、それに気づけたのだからよかったのではないかと、なる。40歳を過ぎた「いい年」の教員が、自分の専門教科のことで新任者のように悩んだり、新しいことにチャレンジしたりする。悪いことではない。

本校の教員間にSELHiという気運がいつそう高まれば、そして教員のやる気がさらに高まれば、生徒もやらないはずがない。多くの人が見る中で普通の授業ができるようになれば、少なくとも度胸は身に付く。その段階に到達して初めて発揮できる、または身に付けることのできる教師の授業力・生徒の英語力というものもあると思う。SELHiは、教師と生徒の両方を鍛えてくれるはずだ。